

打刷毛とは、書画の表具を修理する工程の中で用いられる特殊な刷毛のことです。打刷毛によって裏打紙を打つ行為は、絹や和紙に描書された表具の本紙部分と裏打紙を密着させ、さらに裏打紙の強度を増して表具を堅牢なものにするために不可欠な作業です。

打刷毛の材料には、「津久毛」と呼ばれるインドネシア産のシユロ（棕櫚）の一種アレンプアイバーが用いられます。これを長さ四寸に切り、祖父の代から使用している板でもみほぐし、ゴミヤチリを取り払います。さらに「一本より」といって毛の太さ・堅さ・高さを一定にそろえる工程があります。刷毛一枚分の毛（約三三〇グラム）をそろえるのに半日かかります。

炊いたメリケン粉糊を混ぜた木工用ボンドのりを毛束の根元に入れて一本一本しっかりと固定し、これを先に用意しておいたヒノキ板に挟んで慎重に整え、仕上がり後の刷毛の姿をイメージして刷毛の根元をつけ糸で縫って固定します。こうして完成した打刷毛の総重量は四五〇グラム程度になり、適度な堅さと柔軟性があり、丁寧に使えば二〇年はずっと耐久性を兼ね備えています。

京都のど真ん中である四条烏丸の南東の町中に、藤井源次郎氏の京町屋造りの打刷毛製作の作業場があります。藤井源次郎氏は京都市立第一商業学校を卒業後、ただちに家業の打刷毛製作に従事し、二代目祖父原三郎、三代目父原之

助について修業を始めました。しかし戦争で先代二人を失い、戦後シベリアより復員した昭和二四年に四代目として家業を継ぎました。表具用の打刷毛製作の技術を習得するには、厳しい修業と豊富な経験を必要とするため、現在、国宝・重要文化財の書画を修理するために用いられる打刷毛を製作しているのはごく少数となっています。以後、今日に至るまで打刷毛

選定保存技術

ひょうぐよううちばけせいさく 表具用打刷毛製作

平成10年6月8日選定

ふじいげんじろう
保持者 藤井源次郎

平成10年6月8日認定



選定保存技術および 保持者のプロフィール

書画の修理において、打刷毛によって裏打紙を打つ工程は、本紙と裏打紙とを密着させ、さらに裏打紙の強度を増すために不可欠な作業ですが、その衝撃が本紙に負担を与えないように、柔軟性と堅さを併せ持ち、かつ耐久性のある刷毛でなければなりません。現在打刷毛を製作しているのはごく少数で、藤井氏は国内外の文化財修理関係者にその技術を高く評価されています。

の製作一筋に専念し、伝統技術の継承と後継者の養成に努めています。

国宝・重要文化財の書画類修理を行う「装演修理技術」の選定保存技術の保存団体である「国宝装演師連盟」の技術者が使用する打刷毛のほとんどは同氏の製作によるもので、国内のみならず、アメリカのメトロポリタン美術館やボストン美術館、イギリスの大英博物館、オランダのライデン国立民族博物館等、海外の美術館の修理技術者からも注文されるほど、国内外の文化財保存修理関係者にその技術を高く評価されています。（京都府教育委員会文化財保護課 石川登志雄）



檜皮ひわだとは檜の樹皮のことで、古くから（七世紀の遺跡からも出土している）屋根材として使用され、現在、御所の紫宸殿や清涼殿をはじめ全国の国宝重要文化財建造物の屋根材として、欠くことのできない材料である。この檜の皮を採取するのが原皮師もとしかわしと呼ばれる人たちで、大野豊氏もその一人である。昭和二六年八月から原皮師の大野弘氏に弟子入りし修業した。翌二七年からは原皮師であった父大野桃太郎氏のもとで技術の習得に努めた。昭和二九年八月からは独立して今日に至っている。

原皮師は長さ八〜一五メートルのロープの両端におよそ直径一寸長さ一尺二寸ほどの手木という木を結びつけた「ぶり縄」といわれるロープと先端をはまきりば蛤刃に仕上げたカナメの木でできた「篋くわ」と檜皮を切り落とす「鉋か」の簡単な道具で立木の檜皮を採取する。

檜皮採取技術は、主に七〜八〇年生以上の檜の立木から外皮の部分を篋ではぎ取る技術である。まず、檜の立木の根元に篋を入れたところで鉋を入れて幅七〜八寸で皮を切る。同じことを木の周りを回りながら、順次上のほうにめぐりあげていく。このときぶりを巧みに使い、足がかりにして上のほうの檜皮をはぎ取っていく。最後に鉋で切り落とし、ロープで下に降りる。大きな木では径一メートル高さ二〇メートル以上にもなり、自由に大木を登り降りできるようなものになるのに三〜四年ほどかかる。檜の木を

選定保存技術

選定保存技術および保持者のプロフィール

檜皮とは社寺建築の檜皮葺屋根に使われる材料で、それを採取するためには、80年生以上の檜の立木に登り、樹皮である檜皮をはぎ取る技術が必要です。

檜皮を採取する技術者は原皮師と呼ばれ、大野さんは、50年間以上にわたって原皮師として活躍し、文化財建造物の保存に貢献されています。



ひわださいしゅ 檜皮採取

平成11年6月21日選定

おの ゆたか
保持者 大野 豊

平成11年6月21日認定

傷めずにはぐには、樹皮の下、甘皮、肉皮と呼ばれる一皮を残してはぐ必要があり、熟練した技術が要求される。檜の甘皮の部分に傷をつけずに薄くて丈夫な絹皮の部分をつけてはぎ取る技術を習得するのに四〜五年ほどかかる。また、樹皮の成長期である四月から七月の土用ごろに



かけては、皮をはぐと肉皮の部分までいっしょになってめくれてしまうため、この間は仕事を休まなければならない。そういうわけで以前は農閑期の仕事として、集落一〇〇軒のうち四〇軒ほどが原皮師として働いていたが、現在では一軒のみとなり、昭和五九年からは子息の浩二氏に技術を教え始め、もう一人の弟子とともに三人で檜皮採取を行っている。最近では、（社）全国社寺等屋根工事技術保存会の若手にも技術を伝授しており、既に二十数名が活躍している。

氏は若手に技術を教えるうえで、皮をはぐことだけではだめで、檜のことがわからないとよい檜皮がはげないだけでなく、木も傷める。つまり、悪い檜皮でふいた屋根はもちも悪く、雨漏り等で檜皮葺の屋根の美しさを損なうだけでなく、建物も傷めてしまうことを考えて仕事をしなさいと指導している。



高校在学中の昭和四六年より、牧田三郎氏（選定技術保存「甲冑修理」技術者、昭和五一年認定・平成五年解除）に師事、卒業後本格的

りました。小澤さんの甲冑との出会いは子どものころに大河ドラマを見たことで、当時、見よう見まねでダンボール紙や鉄鍋で甲冑を作ったこともありました。

東京国立博物館内の甲冑修理室が小澤さんの工房です。工房をお訪ねすると、畳敷きの作業場の中央に作業机があり、その上に修理中の兜と仕事道具が置かれ、両側には修理に必要な材料がたんにすに収められていました。

この国宝・重要文化財等の甲冑修理を行っているのが小澤正実さんです。

日本の甲冑には大鎧等に代表されるように実用品でありながら、装飾的にも優れた工芸品が残っています。国宝・重要文化財に指定されている甲冑も二〇〇領ほどあります。

選定保存技術および保持者のプロフィール

日本の甲冑は鉄、金銅、韋、絹糸、漆など、多種の材質から構成されるもので、修理に当たっては当初の構造材を可能な限り生かし、各材質に応じた技術を用いて総合的に修理することが求められる。

また、各時代の甲冑の材質、技法、組成等についても熟知していなければならない。現在国宝・重要文化財の甲冑の修理を行っているのは小澤氏のみであり、その洗練された技術は貴重である。

選定保存技術

甲冑修理

平成10年6月8日選定

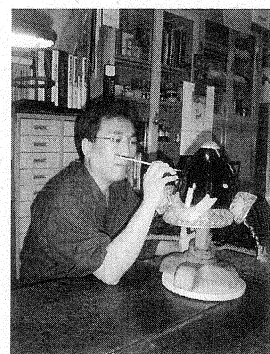
小澤正実

保持者

平成10年6月8日認定

に修理に従事し始めました。正倉院御物の修理および模造製作の助手を務めるなど、一三年間、師匠のもとで仕事を行っています。昭和五九年には、師匠の引退により独立し、東京国立博物館内の甲冑修理室を継承して現在に至っています。独立後、重要文化財「銀伊予札白糸威胴丸具足」、国宝「澤瀉威鎧兜大袖付」など国指定文化財や各地博物館・美術館所蔵の甲冑修理を行っています。

甲冑は鍛鉄、皮革、組紐、布帛、金具、漆等の異なった材料によって構成されており、金工、漆工、染織、韋などの工芸技術を駆使した総合的な工芸品です。修理に当たっては、各時代



の甲冑の材質、技法、組み立て等を熟知していなければなりません。小澤さんは金属を扱い、

漆を塗り、裁縫・刺繍もこなします。

修理では、製作された当時の構造材を可能な限り生かし、補作は必要最小限にとどめます。修復であり、復元であつてはいけないとの考え方からです。

修理に使用する材料を用意するにも苦労されています。甲冑は材料が多く、組紐なら幅、厚さなどが異なり、色もさまざまです。たんにすに収められていた組紐のストックを見せていただきましたが、これらは、小澤さんにとって大切な財産とのことです。

小澤さんがこの仕事を続けてきた基本は、甲冑が好きだということです。文化財としての甲冑修理は絶対的に仕事量が少ないのが現状です。小澤さんは修理を行った際に知りえた技術を後世に残すために、毎年、工程見本を作られています。小澤さんが牧田氏に師事したとき、師匠の年齢は六七歳、小澤さんは現在五〇歳です。今後も洗練された修理技術によってよみがえる甲冑を私たちは博物館・美術館等で目したいものです。

（東京都教育庁生涯学習スポーツ部計画課 大谷 猛）



檜皮（檜の皮）葺および柿葺（樅の木の樹齢五〇年以上の古木からできる自然の赤身材を包丁で割った板葺）の技術は、建造物の屋根葺技術として我が国特有のものであります。

この技術の発祥はつまびらかではありませんが、檜皮葺は八世紀の中ごろに既に用いられており、柿葺は古く発生した板葺を源流として、中世の末にはその技法が定着し大成したとみられています。檜皮葺は、樹齢九〇年以上の檜の皮を採取して、それを家で二尺五寸（七五センチ）

選定保存技術および保持者のプロフィール

檜皮葺は檜の樹皮を、柿葺は杉や樅の手割板を使って屋根をふく技術です。先人から守り伝えられている数多くの檜皮葺・柿葺建造物を良好に維持するためには、これらの屋根葺技術の伝承が不可欠です。

大西氏は、国宝「室生寺五重塔」をはじめとしてたくさんの文化財建造物修理を手がけられており、特に複雑な曲面をもつ唐破風屋根などの施工に優れた腕前を発揮されています。

選定保存技術

ひわだぶき 檜皮葺・こけらぶき 柿葺

平成13年7月12日選定

おにしやすお
保持者 大西安夫

平成13年7月12日認定



チ）、一尺五寸（四五センチ）、一尺二寸（二六センチ）等の平葺製品に仕立て、一枚一枚屋根に並べて竹釘で留めていく地道な仕事です。兵庫県黒田庄町、山南町には、そうした技法を守り続ける檜皮葺および柿葺職人が多数おられます。その中でも、大西安夫さんは、尋常高等小学校を卒業後、昭和一四年に叔父である大城戸与三郎氏に入門。以後国宝「住吉神社本殿」

「瑠璃光寺五重塔」「室生寺五重塔」など日本各地の国宝、重要文化財建造物の保存修理事業に従事されました。また、数多くの施工経験を通じて、葺材を一枚一枚積み重ねて微妙な曲面の屋根をふくために必要な高度な技術を身に付けておられます。特に、精密な技量を必要とする社寺建築の唐破風や簀甲など屋根施工に熟練されていて、平成一三年に選定保存技術の保持者になりました。

現在、多数の檜皮葺・柿葺の建造物が、重要文化財として保護されており、これらの建造物を保存するためには檜皮葺・柿葺の技術は欠くことのできないものであります。指定文化財以外では若干の社寺建築にその需要があるとはいえ、一般建築の分野ではまったく用いられない技術であって、このため、伝承は困難となりつつあります。氏は選定保存技術の保存団体である（社）全国社寺等屋根工事技術保存会が主催する各種研修事業にも積極的に参加し、後進への技術の伝承・技術練磨に指導的役割を担われており、その成果は着実に実りつつあります。

また、伝統技術の啓発活動として、黒田庄町の第四二回文化祭では、一月二日に、大西安夫さんはじめ保存会の皆さんが、檜皮葺を実演。文化祭に訪れる町民はじめ多くの方に伝統技術を見ていただくよい機会となりました。さらに支援の輪が広がることを期待しています。

（兵庫県多可郡黒田庄町中央公民館長 坂本政和）

東京国立博物館に文化財修理の部屋があることを知り、いくたびかの見学の後、加藤義行先生に師事したことを契機に木工品修理の道に進んだ。木工品や金工品・考古資料などの修理技術を学び、加藤先生が急逝すると跡を継ぐことになった。国宝や指定文化財の修理・復元を数多く行う。今思えば、このころに学んだ技術と知識がその後の木工品修理に大きな影響を与えたといえる。

木工品修理の目的は一つに壊れにくくし、元の形に戻すことにある。木がもつ特性を知り、もつとも適した使用方法を選択しなければ、形をくずし、破損することもある。

修理には、修理品と同種の乾燥した木材とともに、漆や膠、砥粉や小麦粉などの古典的な材料を用いる。また、必要に応じてエポキシ系やアクリル系の合成樹脂を使用する。さらに、欠落部分の復元には、粘土や石膏で復元部分の原型を作り、原型に合わせて木を削り、作成することもある。鋸、鑿、彫刻刀、切出しなどの道具も重要で、砥石は必需品である。大胆に彫り出す刃先や繊細に削る刃先などを求め、手元には、日本刀のように鍛造された彫刻刀が二〇〇本近くある。

修理には半年から一年ほどの期間を要する。毎日修理品を見ていると一編の小説を読むかのようで、技術的なことはもちろん、固体の表情、制作者の表現力などから、思想や知識・見識と

いった作者の内面をかいま見ることができると国立博物館所蔵法隆寺伎楽面のうち『太胡夫』と『吾女』の二面の修理では、大胆に削り彫られた痕跡を見て彫師の技術の高さとおおらかに身震いした。

木工品修理は、傷んだものがそれ以上痛まないようにほんの少しだけ丈夫にすることだ。修理は一度で完了するということではなく、過去に修理されたものを再び修理することもありうる。後世の人が三度修理することもありうる。

選定保存技術

木工品修理

平成9年6月6日選定

保持者 桜井 洋

平成9年6月6日認定



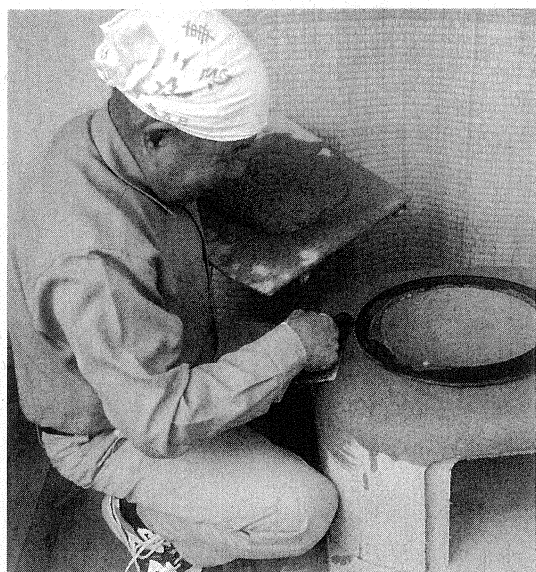
選定保存技術および保持者のプロフィール

我が国の美術工芸品は必ずしも単一の材質技法によるものではなく、複合的な材質をもち、木材を基に漆や装飾金具などを組み合わせた状態で成り立っています。こうした文化財の修理には木工品の製作技術を基本に、漆、膠、金工品などの修理技法にも及ぶ幅広い技術が必要とされます。桜井氏は伝統的木工品修理はもちろん、金属製品を主とした考古資料の修理に多くの業績を有しています。



そのとき容易に修理することができると補修・補強を行わねばならない。樹脂で塗り固めるような行為は、修理とはいえない。修理は謙虚でなければならぬ。木は生きものであり呼吸している。その呼吸を止めてしまったら木は死んでしまう。制作者が「木」に命を注ぎ込んだ。命には限りがあるが、注ぎ込まれた命を少しでも長く後世に延ばすことができればと願っている。

(新座市教育委員会教育総務部生涯学習課
主席主査兼学芸員 斯波 治)



京壁は、色土を用いて塗られた土壁仕上げの総称で、桃山時代以降発展していった数寄屋建築に好んで用いられてきました。使用される土が京都市域あるいはその近郊で採取され、それらは聚楽土、稲荷土、九条土など産出される地名で呼ばれたため、それが全国に広まって、一般に京壁と呼ばれています。

佐藤さんは京都で代々左官業を営む家に生まれ、学業を終えると直ちに実父である徳治郎さんに師事し、左官業一筋で五〇年余り技術の錬磨に励んでこられました。この間、国宝「妙喜庵待庵」や重要文化財「仁和寺飛濤亭」など数多くの文化財建造物修理を手がける一方で、京都の数寄屋座敷等をはじめ広く各地の京壁の施工に携わってきておられます。

京壁の仕上げ技法には、塗土が乾かないうち

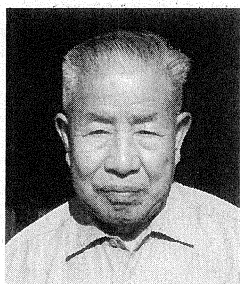
選定保存技術

左官(古式京壁)

平成13年7月12日選定

保持者 佐藤治男

平成13年7月12日選定



選定保存技術および保持者のプロフィール

日本の伝統的左官技術の一つに、土壁の表面を色土で仕上げる「古式京壁」技術がある。これは、木や竹を組んだ骨組みを藁縄等で絡めて下地とし、それに土を塗り重ねて壁体を作り、色土を塗り付けて仕上げる技術である。

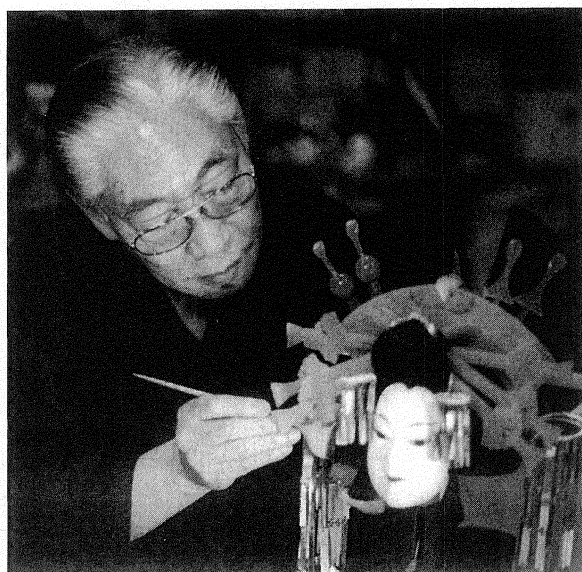
建造物にとっての土壁は、美観だけでなく構造的にも重要で、その施工においては高度な熟練が必要とされる。

に何度も鏝で強くこすりつけて表面に光沢をもたせた「磨き壁」や、凸面をした鏝でゆるやかに表面をなでながら帯状の線を残す「引き摺り壁」など、技術の習得に相当の年月を要するものがあり、これらの技術をもった職人さんは今日では非常に少なくなりました。

現在佐藤さんは、「私が今までこの仕事に従事できたのは、師である父や諸先輩からいろいろなことを教えてもらったことと、それらを身に

付けていくための仕事があったからで、こうして培われた私の技術や知識のすべてを次の世代へ引き継ぐことが私の使命」と、この伝統的な左官技術を後世に伝えていくため、後継者育成や材料の確保、さらには伝統的な土壁のよさを知ってもらうためのさまざまな普及啓発活動に力を注いでおられます。材料の確保では、よい土が産出される付近で工事現場があれば足を運んだり、土蔵が壊されると聞けばその土を確保するために奔走し、普及啓発活動では伝統技術の公開や展示の機会があれば、そこで京壁の実物が見てもらえるようにさまざまな見本を作成したりと、これまでの仕事一筋以上に多忙な日々を過ごされています。ただ後継者育成では、「最近、伝統的な左官職人を志す若者が徐々に増えてきており、また全国文化財壁技術保存会の研修会等に参加される人は皆熱心に勉強をしてくれます。しかし彼らが実践して技術を高めていくための仕事は非常に少なく、せっかくの熱意を生かしていけない」ことを懸念されており、「今日環境問題等が叫ばれていますが、この伝統的な日本壁の技法・技術はまさにその有効な対策ではないでしょうか。もう一度日本壁が見直され普及されることが技術の伝承にとっても不可欠です」と、その復活に向けて意欲的に取り組んでおられます。

(京都府教育庁指導部文化財保護課
文化財専門技術員 鶴岡典慶)



国の重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽」は、我が国が世界に誇る伝統芸能として、平成一五年一月にユネスコから「人類の口承及び無形遺産の傑作」として宣言された。

この文楽を支える不可欠の技術の一つである文楽人形の鬘・床山が、一昨年七月に国の選定保存技術として選定され、初めて保持者に認定されたのが名越昭司さんである。

名越さんは国立文楽劇場退職後も後継者の指導をされているが、昨年七月には四天王寺近くの谷町筋に面した所に作業場と髪型の展示場として「鬘司庵」を開設されるなど、七〇歳を過ぎてもなお、文楽の一般への普及、啓発のため新たな取組をされている。

鬘（カブラ・ズラともいう）作りに従事する

選定保存技術および保持者のプロフィール

文楽人形の鬘を作り取り付け、髪を結い上げる技術である。本来は、鬘師と床山がそれぞれ担う独立した技術であったが、名越氏はどちらにも精通し、担当している。一連の工程は、鬘の型紙（割り型）や鬘の土台となる合金を作るところから始まり、多岐にわたる。名越氏の綿密な時代考証に裏打ちされた確かな技術と、経験によって培われた鋭い感覚は、実演家から厚い信頼が寄せられている。

選定保存技術

ぶんらくにんぎょうかつら とこやま 文楽人形鬘・床山

平成14年7月8日選定

なごししょうじ 名越昭司
保持者 平成14年7月8日認定



者を「鬘師」と呼ぶ。人形の鬘は役柄の首に合わせた銅板に、人毛やヤクの毛で編んだ蓑毛（蓑状に編むため）を付け、前髪・鬘・髷（タポともいう）・髻の各部分を作り、出来上がった鬘を首に鋏で止める。蓑は化粧蓑、中蓑など種類によって二本の紐に二〇から四〇本前後の毛髪を編んでいく。

出来上がった鬘を役柄に合わせて結い上げる

のが「床山」である。基本的な髪型は一二〇種類ほどあり、この基本に櫛、簪、簪、鹿の子などの装飾品が加わりさらに変化する。髪型の決定には役柄の身分や年齢、人形遣いの好みなどが反映されている。髪を結うときには油を使うが、乱れやすいので現在はスプレーやデ IPP など整え、ドライヤーで乾かすなど工夫されている。

名越氏は最初、鬘師である叔父の酒井正己氏に師事し、次いで床山の技術を文楽人形床山の佐藤為治郎氏に師事したが、三年ほどで引退されたため、人形遣いの師匠と相談し、工夫しながら現在まで半世紀にわたって、一人で文楽を支えてこられた。

現在の名越さんは後継者への指導のほか、髪型の保存のため、飾り鬘を作られている。文楽の鬘は公演ごとに作り替えるので髪型が残らない。そこで参考資料として、数年前から飾り鬘を一〇〇点ほど作られているが、まだ立役（男役）を中心に十数点作られていないという。

戦後の混乱、文楽協会の設立、国立文楽劇場の開場、そして今回の傑作宣言と文楽は一時の低迷をしのいだともいえるが、鬘師・床山としてこの五〇年を支えてこられた名越さんには、まだまだお元気で、より一層のご活躍を願いたしております。

（大阪府教育委員会文化財保護課主査 森 成元）

茅葺は、稲、小麦、茅、葭などの植物で屋根を葺く草葺と呼ばれる屋根葺技術の一種です。草葺は古来より建物の種類や地域を問わず行われ、地域ごとに気候・風土に合った技術が伝統的に培われてきました。その中でも茅葺は材料の入手が比較的容易で耐久性もあるため、全国的に見ることができます。

草葺の一般的な民家の場合、屋根は合掌を組み棟木・母屋を配して垂木を取り付け、茅負・籠竹を縄がらみで取り付けます。その上に軒先から順次茅を並べ、要所を押竹で押さえて縄で縫い付けていきます。棟まで葺き上り棟を包み、最後に刈り込みを行い形を整えます。

隅田隆蔵氏が師・東谷庄治氏に弟子入りしたのは昭和二〇年、復員後のことでした。当時はまだ屋根葺職人も大勢いたっていますが、それでも藁葺や麦稈むぎこから（麦藁）葺はできても茅葺までできる者は少なく、近隣では氏を含め三名しかいなかったそうです。

昭和二十四年に独立してからは、吉村家住宅（重文）、旧山田家住宅（重文）、慈光院書院（重文）、片岡家住宅（重文）、吉祥寺薬師堂（重文）、旧春日大社板倉（重文）など数多くの文化財建造物の保存修理や、伊勢神宮の式年遷宮にも二度にわたり携わり、平成天皇即位に際しては大嘗宮悠紀殿の屋根葺工事を行うなど、広範な技術に精通し、優れた技量を発揮されています。

茅は自然の素材であるため、生育条件によって太さや長さ、形状がそれぞれ違い、使用箇所に応じた選別が必要となります。長い茅は水の多く流れる所や棟に、短い茅は水の少ない所や軒先、先の開いた茅は捨茅にといった具合です。捨茅とは茅の角度を調整するために屋根面の奥

かやぶき 茅葺

昭和55年4月21日選定

すみだりゅうぞう

保持者 隅田隆蔵

平成14年7月8日認定

選定保存技術

選定保存技術および 保持者のプロフィール

茅葺技術は、古来より建造物の種類や地域を問わず全国で用いられ、各地の風土にあわせて発展し、地方色豊かに継承されてきた。

近年は住宅事情の変化により茅葺建物が減少しているが、一方では文化的景観や農村景観の重要な要素として注目されている。茅葺技術の保護は、日本の原風景を護り伝える意味でも重要なのである。



に挿入する茅のことで、捨茅で屋根の耐久性が決まるとさえ言われ、葺く茅に見合った位置や量を瞬時に見極めるには相当な熟練を要します。

屋根葺職人として弟子入りして五八年を経過した現在も、現役として文化財建造物の保存修理事業に従事するかたわら、各地の茅葺技能者との交流をとおして技能の習得に努めておられ、（社）全国社寺等屋根工事技術保存会が主催する研修事業等を通じて、後継者の育成と技術の伝承に尽力されています。また、自ら良質の山茅を産する茅場を確保され、材料から施工、施工後の管理という一貫性のある活動をしておられ、文化財建造物をはじめとする多くの歴史的建造物の保護に大きく貢献し、所有者や管理者の多くから感謝されています。



（奈良県教育委員会文化財保護課建造物係主査
馬場宏道）

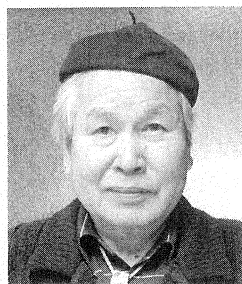


「この建物は、釘を一本も使っていない」文化財の建物をこう説明されているのを聞くことがあります。確かに日本の伝統的な建物の主たる構造は、桝（はこ）を入れたり、貫（ぬき）をとしたりして、文字どおり木を組んで建ち上げていきます。しかし、建物の要所には、思いのほか多くの釘が使用されているのです。

この釘や、飾り金具などの鍛鉄製金具を製作する技術を継承しているのが横山義雄氏です。鍛冶とは、熱した鉄をハンマーでたたいて成形していくものです。切断したり、溶接することせず、たたいて延ばすのが基本です。横山氏は、実父の松之助氏に師事して技術の習得に努

選定保存技術および保持者のプロフィール

金具鍛冶技術は、文化財建造物修理に必要な鍛鉄製金具を製作する技術である。長押の釘隠金具などのように彫刻や金箔押を施して建物を華麗に見せる金具は、技巧的で精緻を極める。また木材同士を緊結する和釘（かずがひ）や鍔（つば）などでは、形状により金具としての効き具合に差が出る。さらにその意匠や技法は建物の時代や地域によりさまざまなため、製作には高度な熟練を要する。



選定保存技術
かなぐかじ
金具鍛冶
平成14年7月8日選定

よこやまよしお
保持者 **横山義雄**
平成14年7月8日認定

め、現在までに数多くの文化財や、京都御所、桂離宮の修理工事に貢献され、多様な意匠や技法に精通されています。

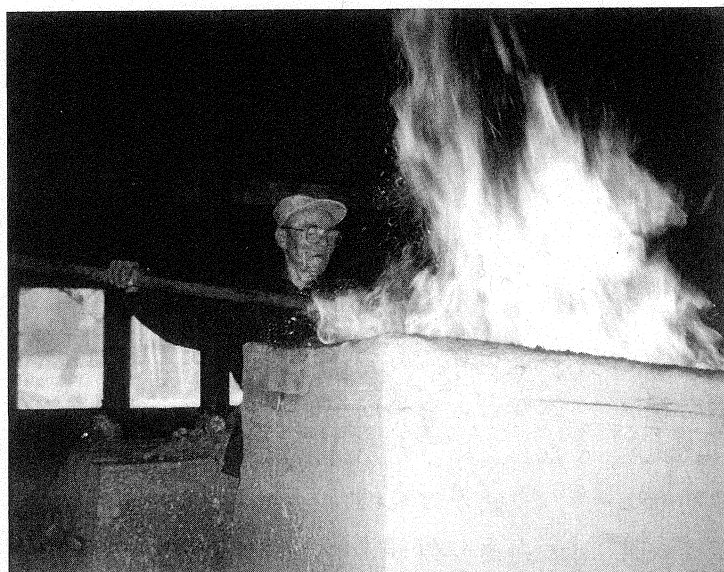
先日工房におじゃまして、おもに釘についてのお話をうかがいました。日本の伝統的な釘は「和釘」と呼ばれ、断面が矩形で、先端に向かって細くなる形をしていて、明治以降造られるようになった丸い断面の釘、「洋釘」とは区別

されています。現在この和釘を造るには、丸い断面の地金（ばんせん）という太い針金を火床で熱し、四角に成形していきます。

作業を拝見しましたが、「鉄は熱いうちに」とおり瞬く間に四角く、先がきれいに細くなっているのがわかります。和釘はこの形により、打ち締めると釘全面で材料同士を緊結しますが、抜くときは比較的簡単に抜け、たたいて鍛えてあるので錆びにくいという特性を持っています。文化財の修理の際、抜いた釘を再び使うことができるのは、このことによるのです。

今まで多くの職人さんの作業を拝見する機会がありました。簡単そうに見える作業ほど難しいものはありません。横山氏のお仕事を拝見するに、熟練という言葉を感じないわけにはいきませんでした。現在和釘の需要は文化財の修理工事に限られているというのですが、それでも注文は何百という単位です。すべて手打ちです。たとえ釘一本とはいえ、手間がかかっていることをもっと広く知ってもらいたいと思います。

現在横山氏の工房は、ご家族で運営され、ご子息の隆成氏、智明氏のお二人が仕事を継ぐべく日々研鑽されています。訪問は短い間でしたが、金具鍛冶の技術は確実に次代に引き継がれていくことを確信したのでした。

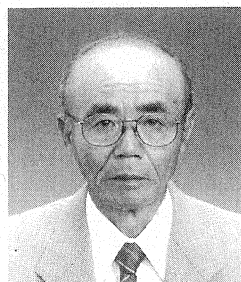


鉄を作る―鉄の母親、村下渡部勝彦の横顔―
この二二世紀に、日本国内にはいまだ二〇〇人以上の刀鍛冶がいる。彼等はその原材料として「玉鋼」とよばれる和鉄を用い、あの美しいくろがねの芸術品を作り出す。その「玉鋼」を作る職人の一人が、ここで紹介する渡部勝彦氏である。

玉鋼は現在、財団法人日本美術刀剣保存協会が、島根県横田町で運営する「日刀保たたら」で冬季に限り作られている。ここでは総計二二名が働いており、特にこの中で最高の技術をもつ二名が選定保存技術保持者に認定され、これ

選定保存技術および保持者のプロフィール

玉鋼は、重要無形文化財「日本刀」製造に不可欠な良質の鋼。玉鋼を精錬する「たたら吹き」には、主としてたたらの築造とその操業方法に精通した「村下」の存在が不可欠である。渡部勝彦は、昭和57年以来、日本美術刀剣保存協会のたたら操業実地研修会の村下代行を努め、平成14年選定保存技術「玉鋼製造（たたら吹き）」保持者に認定された。



選定保存技術 たまはがねせいぞう 玉鋼製造 (たたら吹き)

昭和52年5月11日選定

わたなべかつひこ
渡部勝彦
保持者
平成14年7月8日認定

を「村下」とよんでいる。現今の村下は、すでに昭和六三年に木原明氏がそれに認定され、渡部氏が二人目の認定者となった。ことに渡部氏は、平成七年まで村下でいた故安部由蔵氏の娘婿でもあり、たたらの技術をまさに正統に引き継ぐ一人といつてよい。渡部氏とたたらとのかわりには、昭和五二年の日刀保たたら復興時まで遡る。その際に渡部氏は初級養成員として

参加し、その二年後には上級養成員へ、そしてそのわずか三年後には村下代行に就任する。その後、安部村下とその後継者である木原村下のもとで着実に腕を磨き、平成一四年七月に、村下である選定保存技術保持者に認定された。

氏の仕事はその人柄を反映して、着実、堅実、実直という言葉で表現するのがふさわしい。村下は操業中、常に火の加減や炉内での鉄の反応、ノロと呼ばれる鉄滓の流出具合等をつぶさに実見し、鉄がいかに順調に育成されているかを見なければならぬ。その間の三昼夜は、ほぼ不眠不休でこの仕事にあたることとなる。それだけに技師長である村下の責任はきわめて重大であるといえよう。こうしてできあがった鉄の塊をかねへんに母と書き「鋸」という。渡部氏の仕事はまさしく母のごとく、きわめて繊細に、そして大胆に行われる。

たたらは三昼夜の炎との長い格闘を終えた後、いよいよ鋸を出すための「釜崩し」という釜を崩す作業へと移行する。そののちできた鋸を引き出す「鋸出し」を行い、たたら操業の全工程は大団円となる。当然ここでも村下は全体への責任をもち、操業員への的確な指示を欠かさない。鋸は、奥出雲の氷点下の早朝に出される。釜を崩し、そして鋸出しの大仕事を終え、全身から湯気が立ったその中に、充実した渡部村下の顔があった。

(日本美術刀剣保存協会たたら課学芸員 黒滝哲哉)



一般の家の屋根に葺かれている葺瓦と違い、寺院でよく使用される葺き方を本瓦葺と言います。本瓦葺は丸瓦と平瓦を組み合わせて葺く方法で、複雑な形の屋根を葺くことができます。今回紹介します寺本光男氏は京都の南部の深草瓦町に所在する瓦屋さんです。ここは秀吉が伏見城を築くにあたりあちこちの瓦屋を集めた地域です。京都の寺院の屋根を修理すると鬼瓦等に銘書を発見することがあり、「深草瓦師寺本甚兵衛」とあればそれは寺本家の昔の仕事です。

重要文化財の建造物修理のときは、屋根瓦を一枚ずつ調べて、使用できる瓦とできない瓦に

選定保存技術および保持者のプロフィール

本瓦葺は建物の屋根を葺く伝統技術の一つで、主に寺院建築や城郭建築に用いられている。瓦を葺くときには、雨仕舞や風対策などの実用性と、複雑な曲面による屋根の美しさを形づくることの両者が求められる。また古い瓦にならって新しい瓦を制作し、それらの瓦を取り混ぜて、納まりよく、美しく葺上げるには、高度な技と経験が必要である。

やねがわらぶき ほんかわらぶき 屋根瓦葺(本瓦葺)

平成6年6月27日選定

寺本光男
保持者
平成15年7月10日認定



選別し使用できない瓦の枚数だけ補足し、全部の瓦を新しくすることはしません。本瓦葺きでしたら約五〇年ごとに小修理が行われますので、修理した回数だけの種類の瓦があります。その中から当初と同じ形の補足瓦を制作してもらいます。文様のあるものは瓦型を最初に作りますが、寺本氏は瓦葺きだけではなく鬼瓦や型も制作されます。瓦は焼物ですから焼くと縮み

ますので少し大きく作ります。昔の鬼瓦も手作りですから当然左右対称ではなく微妙にゆがんでいます。これこそが手作りの良さですが、また難しいところでもあります。見本の鬼ができると、現場担当と瓦屋で当初の鬼と見比べながら形の検討を行います。目の前で粘土をつけたり、へらで削りながら微妙な線の変更を行いながらより良い形にどんどん手直しを行います。寺本氏の作業風景を観察していると、本当に厳しく、また楽しそうに作業をされ、昔の職人さんを彷彿させるものがあります。

古い寺院の屋根はきれいな曲線をしています。雨仕舞を考えると難しい問題です。修理を行うと瓦の下傷みからどの部分が雨漏りをしていたかわかります。同じように葺くとまた同じことが起こります。そのため雨漏りを防ぐための対策が必要となります。このことに関して寺本氏の経験による的確な施工により問題の解決ができました。

最近、瓦制作も機械化が進み均一で斑のない瓦ができるようになり、屋根もきれいな形になりましたが、反面無機質で冷たい形です。氏は最近、兵庫県の浄土寺を訪れる機会があり、本堂の屋根を見ると瓦の色も形も一枚一枚違いうが非常にやさしい屋根に見え、こんな屋根を将来葺いてみたいと思ったそうです。

(京都府教育庁指導部文化財保護課
建造物第一係 奥野裕樹)



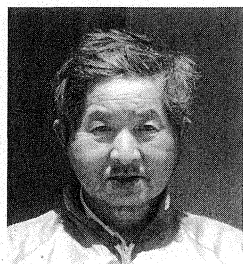
粗苧は、「久留米^{くるとみ}緋^{めがすり}」(重要無形文化財)の緋模様を作り出す緋手くびりの工程で欠かせない紐状の製品です。

この製造技術の継承者が大分県日田郡の矢幡正門氏です。

粗苧の製造は、三月の麻の種蒔きに始まり、二〜三mに成長した麻を真夏(七月末)の炎天下の中で刈り取ります。刈り取った麻は、長さ約1mの刀のように削った竹で、「葉打ち」という葉を落とす作業を行います。「葉打ち」された麻は、束にして高さ三・五mほどの蒸籠^{せいろう}と

選定保存技術および保持者のプロフィール

粗苧は、緋糸の防染に用いられる素材であり、「重要無形文化財久留米緋」の緋手くびりの工程に不可欠なものです。矢幡正門氏は、同じく選定保存技術保持者であった父・矢幡右右見氏(故人)とともに粗苧製造に携わり、技術錬磨に努め、現在はその唯一の技術者として、良質の粗苧を供給しています。



選定保存技術

あらそうせいぞう
粗苧製造

平成15年7月10日選定

やはたまさかど
矢幡正門
保持者
平成15年7月10日認定

いう特殊な窯で四〜五時間蒸します。その熱が冷めぬうちに、一本一本根元から表皮をはぎ取り、この表皮を一日半ほど天日干しして、粗苧がでか上がります。

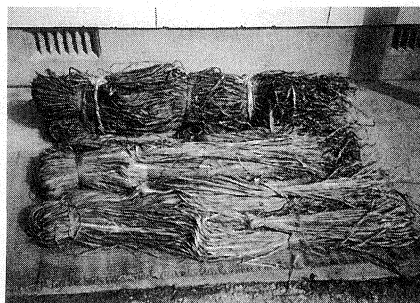
これらはすべて手作業で行われ、早朝から深夜に及ぶ過酷なものです。収益率が低いことから、製造技術者は減少の一途をたどり、昭和四〇年代中ごろには唯一製造していた当地でも

一人もいなくなつたそうです。しかし、久留米緋技術保存会からの強い依頼で、昭和四九年、父親である矢幡右右見氏(故人)平成八年から平成十一年の間粗苧選定技術保持者に認定されていた)が正門氏とともに生産を再開し、現在に至っています。

現在は、正門氏と妻の絹子さん・母親のヤヨさんの三人で製造を続けていますが、製品の乾燥を保つことや麻が大麻の原料になることから、管理面でたいへん苦労しているようです。

正門氏が、「これからは後継者の育成にも取り組み、需要がある限り製造を続けたい」と心強く語られたのがたいへん印象的でした。

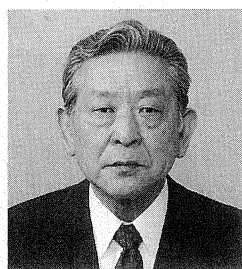
(大分県教育庁文化課主幹兼文化財管理係長 栗原 眞)





選定保存技術および 保持者のプロフィール

髪屋から受け取った髪のを髪を結い上げ、かつ公演期間中その維持管理を行う技術である。床山は普通立役（男性の役）、女方（女性の役）に担当が分かれるが、鴨治氏は故11世市川團十郎に付き、次いで團十郎の妹婿で女方の中村雀右衛門を兼務し、立役・女方両方の結髪技術を体得した希有な存在である。その技術は高く評価され、歌舞伎俳優の信頼が厚い。



選定保存技術 かぶきとこやま 歌舞伎床山

平成15年7月10日選定

かもじとしかず
保持者 鴨治歳一
平成15年7月10日認定

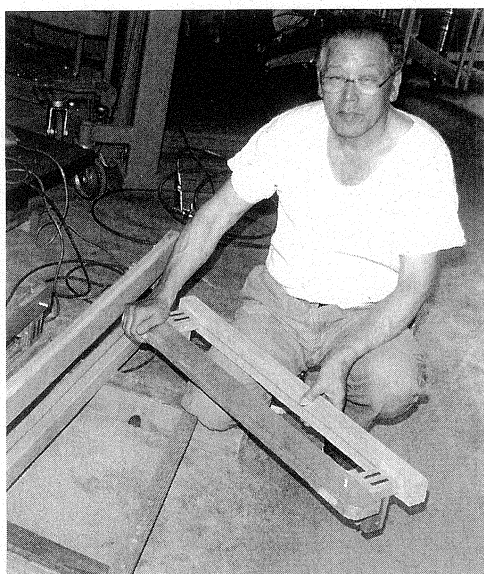
の役。主体に歌舞伎、舞踊の髪を扱う東京鴨治床山（株）の会長である。東京鴨治床山（株）の創設者鴨治虎尾さんは、大正・昭和の名優一五代目市村羽左衛門などの床山、堀越利三郎のもとで修業し、二五歳で床山の指導的立場につき、後に会社を設立して社長となった。歳一さんはその四男。一五歳で父虎尾さんに師事し、父と同じ道を歩み始めた。

床山の仕事は、役者ごとに担当が決まっている。役者が次々と役を経験するのと同じで、床山も大部屋役者の、捕手、花四天などから仕事を始め、だんだん役の髪を任されるようになる。鴨治さんは、二〇歳前に、花形歌舞伎の座頭だった一四代目守田勘弥付きとなり、昭和三十七年四月の襲名から一一代目市川團十郎を担当。團十郎没後、先輩から受け継いで、中村雀右衛門の担当となり、女方の髪にも挑むことになった。

あわせて担当してきた当代の市川團十郎、坂東三津五郎などは後進に引き継いだ。『金閣寺』の雪姫など大役を今なおこなす雀右衛門の髪は、現在も担当する。雀右衛門が、鴨治さんを手放さないのである。髪は役者の体の一部となる。だからなじん人、気心の知れた人が結う髪が一番。この信頼関係が、いい舞台、いい演技の原動力となっているのだと思う。

「役者の役に対する気持と一緒にやって仕事を」これが鴨治さんのモットー。髪も役に扮しているの、性根の表し方が大事である。

代々の役者や床山の先人が演技に合うよう工夫を凝らし淘汰してきたものを大切に受け継ぎ、現代の自分たちの工夫を加えて、次の代にきつちり伝えるのが使命。床山という伝統技術に携わる者としては、三代にわたって責任をもたなくてはならないと鴨治さんは考えている。

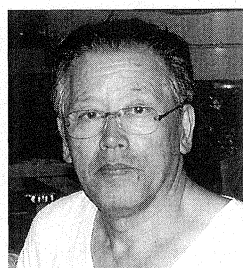


西陣織が応仁の乱後に発達し、江戸時代中・後期にその隆盛を迎えると、技術改良が進んだ多くの手機がその足元を支えました。しかし、明治以降の機械化、その後の西陣織の減産により手機製作量も減少し、西陣で手機製作を行っている店は、西村種一氏の「姫小機にしむら」のみになっています。

西村種一氏は、昭和二十七年から、祖父徳次郎氏、父季夫氏のもとで手機製作技術の習得に励まれました。木材を主要な原材料とする手機製作には、松・桜・樺・檜など多種の針葉樹や広葉樹が用いられ、各種木材の硬軟等の特性を活かす知識・加工技術が必要とされます。木材の乾燥も重要で、西村さんは、作業所とは別の倉庫で充分乾燥をさせるため、製品に狂いが生じたといったことは聞かないとおっしゃいます。手機は、織物の種類に応じて設計、製作される

選定保存技術および保持者のプロフィール

手機製作は、手織用の木製の機（織機）を製作する技術。使用目的等に応じて機を設計し、各種の木材を製材・整形して組み立てて仕上げる。製作には、木材と織物の製作技術に関する深い知識が必要とされる。西村種一氏は京都に生まれ、祖父・徳治郎氏及び父・季夫氏に師事して手機製作技術を学び、さまざまな需要に応じた手機の製作を手がけている。



選定保存技術
**て ば た せ い さ く
手 機 製 作**
平成 15 年 7 月 10 日 選定
にしむら たねいち
西村種一
保持者
平成 15 年 7 月 10 日 認定

ため、機の構造・機能はもとより、織物製作技術等広い知識と経験が必要とします。さらに、御子息知之さんの協力も得て、金属加工や機械、電子技術等にも対応しておられます。また、地元西陣で使用される綴機やジャガード機などの手機製作に加えて、修理・復元なども多数手がけられました。例えば、紋織物製作機として空引機を復元（昭和六一年、山口能装

東研究所）や、旧四〇〇ジャガード機ほかを復元（平成一四年、福井県立博物館）のほか、昭和六二年には障害者向け特殊手織機を製作し宝塚市ほかに納めるなど、各地の研究・教育機関等と協力して文化財保存修理にも貢献されています。

機織り作業は個々の織り手が、機に向かって長時間の作業を余儀なくされます。西村さんは使用者の視点を大事にして、木目模様や節の向きなど各部材の仕上がりにこだわり、細心の配慮を心がけておられます。西村さんは技術の習得も細心の配慮も、日常生活の中で口伝と作業の見覚えにより、自然と身についたものとおっしゃいます。それゆえ、手機製作の技術は教えるように思っていることではなく、後継者に伝えていくには、やる気のあふれた十代の若者にとともに作業をしながら経験を積み重ねてもらいたいと考えておられます。

（京都府教育庁指導部文化財保護課主任 有井広幸）

